

飲料メーカー「キンキサイン」 南海トラフに備え

飲料水提供へ生産態勢整え

神河町と協定

阪神・淡路大震災31年

阪神・淡路大震災から17日で31年となった。姫路・西播磨の各地でも、遺族や地域住民らをはじめ、

学校や企業などもそれぞれ防災を考える活動に取り組んでいる。記憶や教訓を語り継ぐ展示、災害に備えた訓練、ワークショップなどを通して、命を守る思いを新たにしたい。

震災時、お湯入りペットボトルで支援

避難者ら暖を取り飲む人も



南海トラフ巨大地震の発生に備え、自治体に飲料水を供給できるよう準備するキンキサインの山口義弘会長
神河町福本

飲料メーカー「キンキサイン」(姫路市豊沢町)は

南海トラフ巨大地震の発生時、自治体などにペットボトル入り飲料水を提供するための生産態勢を整えている。工場が神河町にあるため、沿岸部に比べて被害が少ないと想定。阪神・淡路大震災では神戸に湯を届けて「即席湯たんぽ」を提供した山口義弘会長(78)は「できることで役立ちたい」と話し、自治体や企業などから情報を募る。

同社は1970年に創業し、現在はペットボトル入りのお茶やスポーツドリンクなどを複数の大手メーカーから受託生産する。同町福本の本社第2工場は2003年に移転。約6万平方メートルの敷地のそばには市川と越知川が流れ、豊富な地下水をくみ上げている。

同社は常時、殺菌した水

など480トンを貯留している。普段は飲料水商品を作っていないが、有事にラインを調整すれば、2リットルペットボトル入り飲料水を1時間あたり約1万8千本作ることができるといふ。

「生産態勢はすぐに整えられる」という一方で、山口会長は「発生時に誰が水を必要としているのか、工場からどう引き渡すのかなど課題がある」とする。同社は12年、災害時に飲料水を提供する協定を同町と締結。効率的に水を届けるため、他の自治体とも連携を進めたいとしている。引き渡し方法についても協力や情報を募っている。

豊富な水があり、ペットボトル容器も製造する同社は、31年前の阪神・淡路大震災で被災地支援に携わった経験がある。当時社長だった山口会長は、発生直後に神戸市内の避難所でボランティアをしていた知人から「みんな寒がつている。百個ぐらい湯たんぽがほしい」と連絡を受けた。

「それやったらペットボトルにお湯を入れたらええやろ」。山口会長は当時姫路市香寺町にあった工場に、業務用の3リットルタンクに95度の湯を充てん。1リットルのペットボトル容器約3千本も用意し、トラックに積んで社員とともに神戸市中央区に向かった。発生から3日後の夜のことだった。

阪神・淡路を通じ、山口会長は「災害時にどれほど水や湯が必要とされるかを痛感した」という。「全ての人を助けることはできないが、自分たちが動けるときは、身近で助けられる人を助けたい」と意気込む。

(金 慶順)